

PROG テストで見る大学生のジェネリックスキル

— リテラシーとコンピテンシーの測定結果から* —

坂本 俊輔[†]

要 旨

本稿では PROG テストを用いて、大学生のジェネリックスキル（社会で必要とされる汎用的な能力）の測定を行い、リテラシーやコンピテンシーの水準とそれらを構成するさまざまな能力について、特に学年による変化に注目して分析した。例えば、リテラシーの構成要素としての情報分析力は1・2年生においては目立って低かったが、3・4年生では大きく上昇しており、大学の授業や就職活動の経験などを通じて情報を分析する能力が向上する可能性が示唆された。また、リテラシーよりもコンピテンシーの方が全体として学年とともに着実に向上していく傾向があり、とりわけ親和力、協働力、統率力で構成される対人基礎力の伸びが大きいことが分かった。

1. はじめに

従来の日本の大学教育は一般教養科目や専門科目の履修を通じたいわゆるアカデミックな学びが中心で、専門的な知識や能力を持った人材を社会に輩出することが主な目的であった。しかし近年では、専門分野に関わらず社会で必要とされる汎用的な能力、「ジェネリックスキル」を大学において育成することの重要性が強調されるようになってきている。

大学教育の根本に関わるこうした新しい考え方の登場の背景にあるのは、OECDが1997年に立ち上げたDeSeCo (Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations) と呼ばれるプロジェクトである。同プロジェクトは、現代社会で我々が直面するさまざまな課題を解決するために必要とされるコンピテンシー（能力や行動特性）の概念を定義し、その枠組みを3つの「キー・コンピテンシー」(Using tools interactively, Interacting in heterogeneous groups, and Acting autonomously) として整理した。すなわち、IT や言語など

* 本研究は森平直子氏、玉城逸彦氏との共同研究の成果であり、平成22年度および23年度学長所管研究奨励金による助成を受けた。また、質問紙調査の実施にあたっては多くの学生たちの協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

[†] 城西大学経済学部准教授

のツールを使いこなす能力、多様なバックグラウンドを持つ人たちと関係を築く能力、自律的に行動する能力の3つをコンピテンシーの核となる要素に位置づけ、その評価と育成がこれからの教育において欠かせないとした⁽¹⁾。

日本の大学教育において関心を集めているジェネリックスキルの定義や内容は多くの部分でこの OECD のキー・コンピテンシーに沿ったものであり、現在ではいくつかの政府機関が異なる名称や定義でジェネリックスキルに相当する能力の育成の必要性を訴えている。例えば、経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」や中央教育審議会（文部科学省）が2008年に答申した「学士力」などがその代表的なものである。

大学教育におけるジェネリックスキルの育成が注目される中で、学生たちが身につけたジェネリックスキルを客観的に把握する方法も開発されるようになり、現在では「PROG（プログ）」と呼ばれるジェネリックスキルを測定・育成するためのプログラムが多くの大学で導入されている。同プログラムで実施される PROG テストの詳細については次節で説明するが、このテストによって測定した学生たちのジェネリックスキル（リテラシーおよびコンピテンシー）を対象とした研究がここ数年増加している。

例えば、亀野（2017）は PROG テストで測った大学生のジェネリックスキルが学業成績や就職の結果とどのように関係しているかを相関分析や重回帰分析により明らかにしている。分析結果によれば、コンピテンシーの水準と1年生および3年生の学業成績（GPA）との間に相関関係はほとんどないが、4年生および修士2年生の就職指標（内定先満足度）の値はコンピテンシーの水準が高い学生ほど大きくなるという。

Ito（2014）や Uchida et al.（2018）も大学1年生を対象にして、PROG テストで測ったリテラシーやコンピテンシーの水準が GPA などの学業成績の指標と正の相関があるかどうかを調べている。Ito（2014）はリテラシーもコンピテンシーも学業成績との正の相関は弱いことを指摘し、Uchida et al.（2018）はリテラシーのみが GPA と正の相関関係にあるとしている。Ito（2014）は分析結果を受け、他の多くの研究が PROG テストと大学入学時のプレースメントテストの点数、つまり高校までに培われた学力との間に強い正の相関があることを報告している点を考慮に入れた上で、PROG テストが大学生のジェネリックスキルを適切に測定できていない可能性に言及している。

一方、English et al.（2019）は160人の大学1年生を対象にして、PROG テストで測ったリテラシーやコンピテンシーの水準が学生たちの潜在的な英語学習能力（TOEIC のスコアや英語クラスの成績）を表す指標として有用であることを明らかにしている。TOEIC の総合スコアの伸びはリテラシーの水準とのみ弱い正の相関があり、TOEIC のリーディング分野のスコアの伸びはリテラシーおよびコンピテンシーの水準と弱い正の相関があるという。また、TOEIC の点数

が310点以下の相対的に英語が苦手な学生のみを対象にして分析すると、TOEIC のリスニング分野のスコアの伸びもリテラシーの水準と弱い正の相関関係にあることが確認され、さらに総合スコアとリテラシーとの間の相関や、リーディング分野のスコアとコンピテンシーとの間の相関はより強くなるという。英語クラス（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）の成績も、英語の苦手な学生に関してはリテラシーの水準と正の相関関係にあることが指摘されている。

高校生版の PROG である PROG-H の測定結果を利用した研究もある。角方（2018）は高校2年生3,445名のデータを用いて、難関大学への合格（上位100名）が入試の選抜方法の変更によってどのような影響を受けるかをシミュレーションによって分析している。従来の教科学力を重視した選抜方法に替えて、リテラシー（思考力）やコンピテンシー（主体性）を含めて高校生を多面的に評価して選抜する方法を採用した場合、偏差値の高い進学校の高校生の合格率は減少し、一方で中堅校以下の高校生の合格率や女子の合格率が上昇するという。また、従来型の選抜方法では合格していた高校生も、多面的な評価を行う選抜方法では半分近くが不合格になるという。

本稿では著者の勤務する城西大学経済学部で実施した PROG テストの結果から、大学生のジェネリックスキルの水準を構成要素ごとに整理し、さらに学年を通じてリテラシーおよびコンピテンシーの水準がどのように変化するかを分析する。以下では第2節で PROG テストの概要について、第3節で調査の方法について説明した後、第4節で PROG テストの実施結果を統計的に分析し、最終節で結果を総括する。

2. PROG テストの概要

PROG (PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS: プログ) は、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発したジェネリックスキルの評価・育成プログラムで、PROG テストおよび育成支援プログラムから構成されている。ジェネリックスキルの評価を行う PROG テストは2010年に「基礎力測定テスト」の名称で試行版が、2011年にβ版が実施され、2012年から製品版として正式にスタートしている⁽²⁾。PROG テストはそれまで客観的に評価することの難しかった大学生のジェネリックスキルの水準を可視化するツールとして大きな注目を集め、2016年8月末の時点では全国の370大学で導入され、延べ約39万人もの学生が受験している⁽³⁾。

PROG テストが測定するジェネリックスキルは、「リテラシー」と「コンピテンシー」の2つの領域に大きく分けられ、テスト（質問紙による調査）も別々に実施される。リテラシーは「実践的に問題を解決に導く力」と定義され、習得した知識を活用することで育成される。一方、コ

ンピテンシーは「周囲の環境と良い関係を築く力」と定義され、経験を振り返り意識して行動することで育成される。

リテラシーもコンピテンシーもそれぞれ複数の要素から構成され、それらは表1にまとめられている⁽⁴⁾。リテラシーは問題解決力として、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力の4つの力に分けられ、さらに言語処理能力および非言語処理能力も含む。なお、言語・非言語処理能力は情報分析力の一部を構成している。

一方、コンピテンシーは対人基礎力、對自己基礎力、対課題基礎力の3つの力に大きく分けられ、さらに対人基礎力は親和力、協働力、統率力の3要素、對自己基礎力は感情制御力、自信創出力、行動持続力の3要素、対課題基礎力は課題発見力、計画立案力、実践力の3要素にそれぞれ分解される。これら9つの要素もさらに細かい33の詳細要素に分解され、これらでコンピテンシー領域を構成している。

ここで注意したいのは、PROG テストで使われるリテラシー、コンピテンシーの名称はOECDのDeSeCoで定義されるそれとは異なる点である。PROG テストにおいてはリテラシーとコンピテンシーはお互いに排他的な領域で、これら2つでいわゆるジェネリックスキルを構成する。一方、DeSeCoではコンピテンシーという名称はより広義の「能力」の意で、いわばジェネリックスキルに相当し、リテラシーはそこ（コンピテンシー）に含まれる能力の一つとして定義される。本稿では、リテラシーおよびコンピテンシーの名称をPROG テストで使われる意味で用いる。

3. 調査の方法

著者を含む城西大学経済学部の3人の教員が担当する合計12のゼミの授業において、2012年7月にPROG テストを実施した。1~4年生の男女200人超がリテラシーおよびコンピテンシーに関する質問紙調査に回答し、エラーのある観測値を除去した結果、リテラシーについては217人、コンピテンシーについては184人のデータが得られた。

なお、本調査を実施するにあたっては、調査への学生の参加は任意で、参加の有無や回答した内容が学業成績や単位取得に影響を与えることは一切ないことを十分に説明した。

4. 測定結果と考察

表2および3は、学生たちのリテラシーとコンピテンシーの測定結果の基本統計量を示している。リテラシー（総合）の平均スコアは2.76で、構成要素別に見ると情報収集力が2.64、言語

表1 PROGテストの概要

領域	説明	分類	構成要素	詳細要素	実施形態
リテラシー (実践的に問題を解決に導く力)	知識を活用して問題を解決する力 (習得した知識を活用することで育成される)	問題解決力	情報収集力 (課題発見・課題解決に向けて、幅広い観点から適切な情報元を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力) 情報分析力 (事実・情報を思い込みや臆測ではなく、客観的にかつ多角的に整理・分類し、それらを統合して隠れた構造をとらえ、本質を見極める力) 課題発見力 (様々な角度、広い視野から現象や事実をとらえ、その背景に隠れているメカニズムや原因について考察し、解決すべき課題を発見する力) 構想力 (様々な条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処方法を構想する力)	-	選択式30問(2015年度までは選択式28問、記述式2問) 時間:45分 評価方法:リテラシー(総合)は7段階評価。情報収集力など4つの構成要素と言語・非言語処理能力はそれぞれ5段階評価。
コミュニケーション (周囲の環境と良い関係を築く力)	経験を積むことで身に付いた行動特性 (経験を振り返り意識して行動することによって育成される)	言語処理能力 (語彙や同義語、言葉のかかり受けなど、日本語の運用に因する基礎的な能力) 非言語処理能力 (教的処理や推論、図の読み取りなど、情報を読み解くために必要な(言語以外の)基礎的な能力) 対人基礎力	親和力 (円滑な人間関係を築く) 協働力 (協力的に仕事を進める) 統率力 (場を読み、目的に向かって組織を動かす) 感情制御力 (気持ちの揺れをコントロールする) 自信創出力 (ポジティブな考え方やモチベーションを維持する) 行動持続力 (主体的に動き、良い行動を習慣づける) 課題発見力 (問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う) 計画立案力 (問題解決のための効果的な計画を立てる) 実践力 (効果的な計画に沿った実践行動をとる)	-	251問:同前選択形式195問、場面想定形式(短文)50問、場面想定方式(長文)6問 時間:40分 評価方法:コミュニケーション(総合)、対人基礎力など3つの構成要素はそれぞれ7段階評価。33の詳細要素はそれぞれ5段階評価。
		対自己基礎力		親しみやすさ、気配り、対人興味・共感・受容、多様性理解、人脈形成、信頼構築 役割理解・連携行動、情報共有、相互支援、相談・指導・他者の動機づけ 話し合う、意見を主張する、建設的・創造的な討議、意見の調整・交渉、説得 セルフケア・アセス、ストレスコーピング、ストレスマネジメント 主体的行動、完遂、良い行動の習慣化 情報収集、本質理解、原因追究 目標設定、シナリオ構築、計画評価、リスク分析 実践行動、修正・調整、検証・改善	

(注)リテラシー領域の言語処理能力および非言語処理能力は、情報分析力の一部を構成している。
(出所)学校法人河合塾および株式会社リアセックのウェブサイトを基に筆者作成。

表2 リテラシーの測定結果

	観測数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
総合	217	2.76	1.89	1	7
情報収集力	217	2.64	1.65	1	5
情報分析力	217	2.32	1.42	1	5
課題発見力	217	2.44	1.50	1	5
構想力	217	2.20	1.58	1	5
言語処理能力	217	2.66	1.69	1	5
非言語処理能力	217	1.83	1.14	1	5

(注) 言語・非言語処理能力は、情報分析力の一部を構成している。

(出所) 筆者作成。

表3 コンピテンシーの測定結果

	観測数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
総合	184	4.55	1.10	1	7
対人基礎力	184	4.86	1.10	2	7
親和力	184	4.86	0.99	2	7
協働力	184	4.80	1.33	1	7
統率力	184	4.77	1.35	1	7
対自己基礎力	184	4.29	1.10	2	7
感情制御力	184	4.18	1.47	1	7
自信創出力	184	4.42	1.25	1	7
行動持続力	184	4.37	1.38	1	7
対課題基礎力	184	3.88	1.24	1	7
課題発見力	184	3.09	1.61	1	7
計画立案力	184	4.28	1.26	2	7
実践力	184	3.95	1.86	1	7

(出所) 筆者作成。

処理能力が2.66と相対的に高かった。一方、非言語処理能力は1.83と他の要素に比べて極端に低く、これは基礎的な数学力や論理的思考力の弱さを反映していると考えられる。入試科目で数学を選択しないことが多い私立文系学部の学生に典型的にみられる傾向かもしれない。

コンピテンシー（総合）の平均スコアは4.55で、3分類の能力別では対人基礎力が4.86で最も高く、対自己基礎力は4.29、最も低かったのが3.88の対課題基礎力であった。さらに細かい構成要素別に見ると、最も高かったのが親和力（4.86）で、次いで協働力（4.80）、統率力（4.77）の順で、いずれも対人基礎力を構成する要素である。一方、目立って低かったのが対課題基礎力

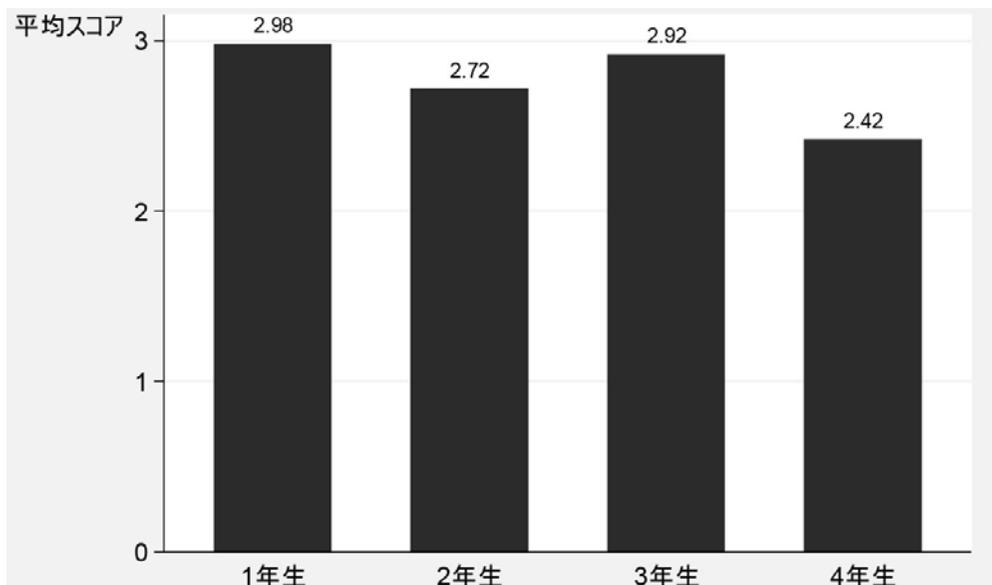
を構成する要素の一つ、課題発見力（3.09）であった。課題発見力はさらに情報収集、本質理解、原因追究といった詳細要素に分解される能力であり、学生たちの社会への関心や勉学に対する意欲の低さをある程度反映していると思われる。

次に、学年別にデータを整理して、リテラシーおよびコンピテンシーの水準が学年を通じてどのように変化するかを見てみよう。

4-1 学年別リテラシー

リテラシーのデータが得られた217人の学生のうち、1年生は46人、2年生は60人、3年生は61人、4年生は50人であった。図1によれば、リテラシーの総合力の平均スコアは1年生が2.98で最も高く、2年生では2.72に大きく下がっていた。3年生でまた2.92まで上がったが、4年生になると最も低い2.42になった。この結果からは、学年を通じた効果、すなわち大学での教育を通じてリテラシーの総合力が向上するという効果は見られず、大学入学時のリテラシーの水準をそのまま反映している可能性も考えられる。

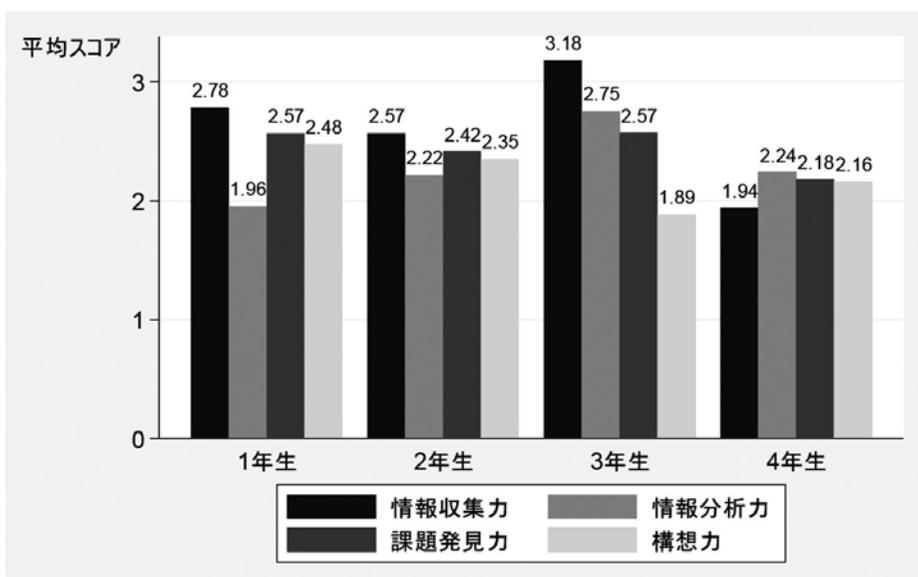
図2は学年別にリテラシーの4要素の測定結果を示している。1・2年生については各要素間のバランスが似通っており、最も高かったのが情報収集力、次いで課題発見力、構想力と続き、情報分析力が最も低かった。一方、3・4年生の各要素間のバランスはこれと大きく異なり、1・



(注) 1年生：46人、2年生：60人、3年生：61人、4年生：50人。

(出所) 筆者作成。

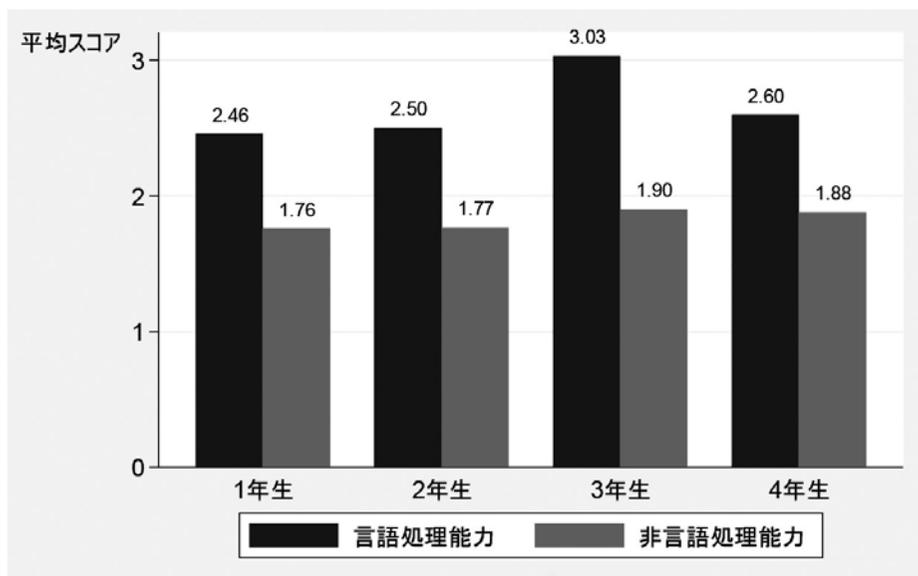
図1 リテラシー（総合）



(注) 1年生：46人，2年生：60人，3年生：61人，4年生：50人。

(出所) 筆者作成。

図2 リテラシーの4要素



(注) 1年生：46人，2年生：60人，3年生：61人，4年生：50人。

(出所) 筆者作成。

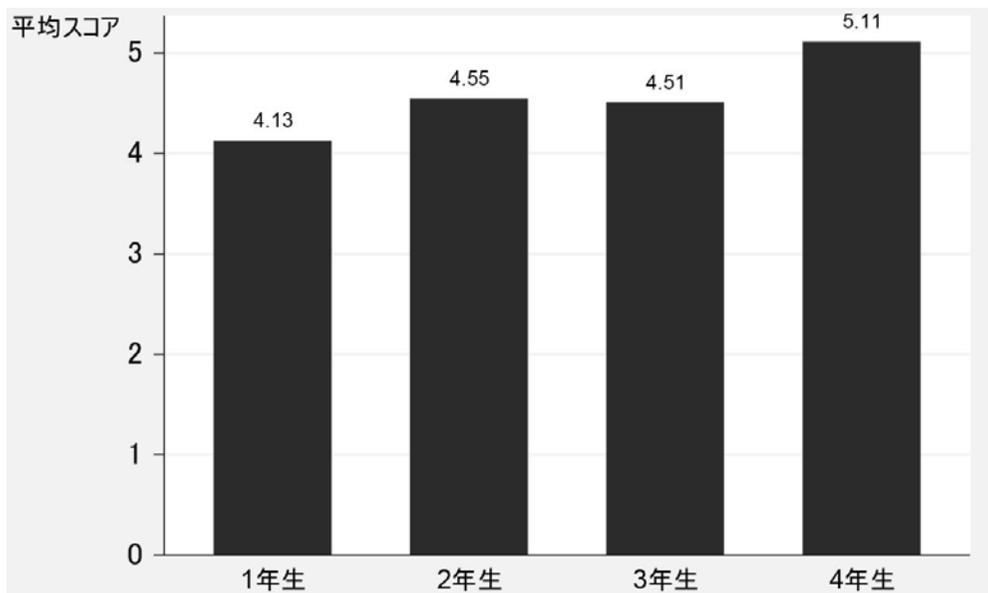
図3 リテラシー（言語・非言語処理能力）

2年生で最も低かった情報分析力は3年生では2番目に高く、4年生では最も高かった要素になっている。平均スコアの水準も3・4年生の方が高く、情報分析力は大学での授業や就職活動などを通じて向上する可能性が示唆される。また、構想力は3・4年生よりも1・2年生において高い傾向にあった。

図3は、情報分析力の一部を構成する言語処理能力および非言語処理能力の測定結果を学年別に示している。どの学年も言語処理能力の方がかなり高かった。また、両能力とも1年生から3年生まで徐々に伸びており、授業や就職活動の経験によってこれらの能力が向上する可能性が考えられる。この結果は、図2の情報分析力の測定結果と整合的であるといえる。

4-2 学年別コンピテンシー

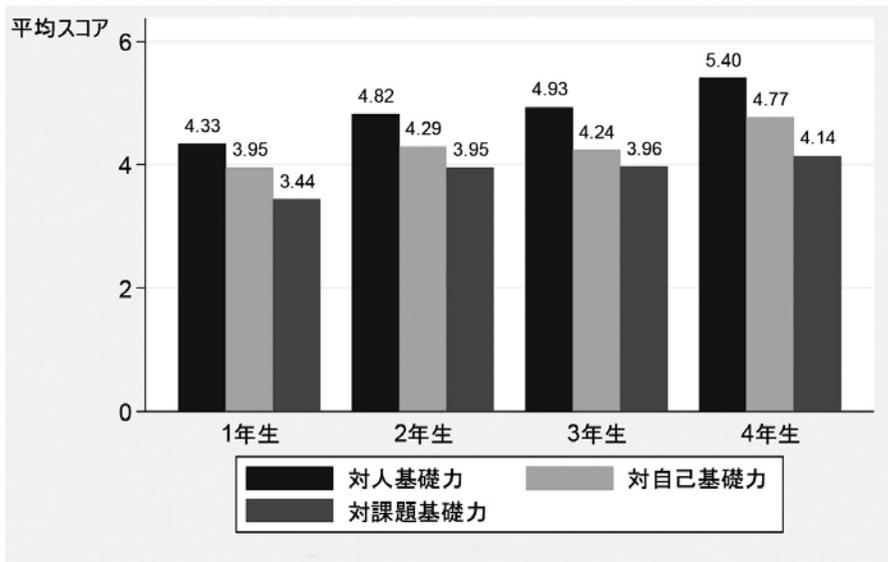
コンピテンシーのデータが得られた学生は184人で、そのうち1年生は39人、2年生は55人、3年生は55人、4年生は35人であった。図4が示すように、コンピテンシーの総合力は2年生から3年生にかけてやや低下するものの、リテラシーの場合と比べると明らかに学年を通じて上昇する傾向が見られた。



(注) 1年生：39人、2年生：55人、3年生：55人、4年生：35人。

(出所) 筆者作成。

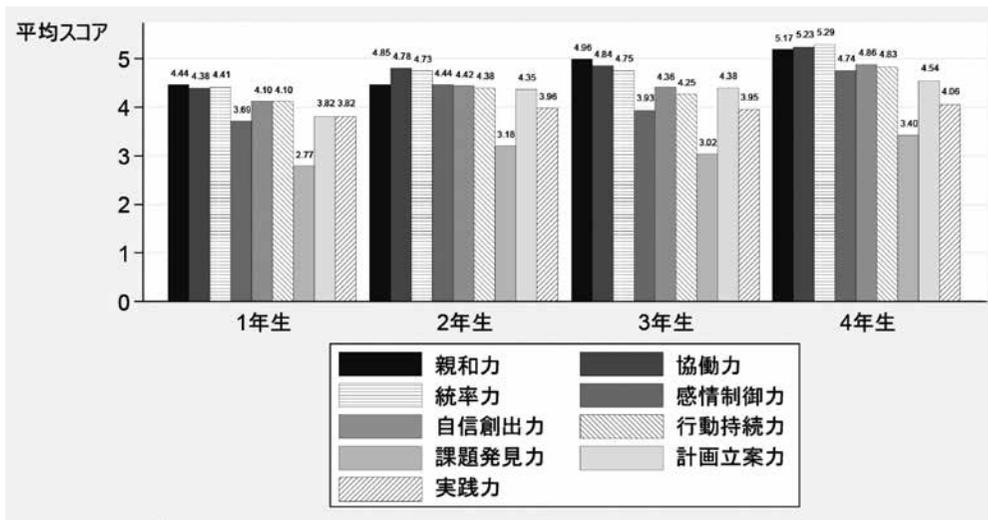
図4 コンピテンシー（総合）



(注) 1年生：39人，2年生：55人，3年生：55人，4年生：35人。

(出所) 筆者作成。

図5 コンピテンシー（対人・對自己・対課題基礎力）



(注) 1年生：39人，2年生：55人，3年生：55人，4年生：35人。

(出所) 筆者作成。

図6 コンピテンシーの9要素

コンピテンシーを構成するより細かい要素の測定結果を図5および6により確認すると、対人基礎力を構成する親和力、協働力、統率力の3つの要素がいずれも学年を通じて一様に上昇していた。また、対課題基礎力を構成する要素の一つ、計画立案力も同様であった。一方、対自己基礎力を構成する各要素は学年とともに上昇する傾向はあるものの、すべて2年生から3年生にかけて下がっていた。

以上の結果から、学年が上がるにつれて学生たちのコンピテンシーの水準は向上するといえるが、それは特に対人基礎力や対課題基礎力の上昇によるところが大きい。大学での授業のほか、クラブ・サークル活動や就職活動、またキャンパス外でのアルバイトやボランティアなどさまざまな経験を通じて、こうした能力を高めた可能性が考えられるだろう。

4-3 リテラシーとコンピテンシーの相関関係

最後に、PROG テストで測定したリテラシーとコンピテンシーが大学生のジェネリックスキルを示す指標として、それぞれ異なる能力をうまく表せているかどうかを簡単に確認してみよう。表4の数値は、リテラシーとコンピテンシーの各要素間の相関係数を示している。

表4 リテラシーとコンピテンシーの相関関係

	リテラシー (総合)	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語 処理能力	非言語 処理能力
コンピテンシー (総合)	-0.1277	-0.1807*	0.0144	-0.1497*	-0.0123	-0.0457	-0.041
対人基礎力	-0.0408	-0.1307	0.0514	-0.0042	-0.0165	-0.0224	0.0045
対自己基礎力	-0.1134	-0.113	0.0676	-0.1289	-0.0734	0.0237	-0.0077
対課題基礎力	-0.0991	-0.1809*	-0.0048	-0.0846	-0.0223	-0.1121	-0.085

(注) リテラシーとコンピテンシーの両方のデータが得られる184人を対象として計算。

*は5%水準で統計的に有意であることを示している。

(出所) 筆者作成。

リテラシー（総合）とコンピテンシー（総合）の間の相関係数はマイナスであったが、統計的に有意でなく、相関があるとはいえない。情報収集力と対課題基礎力の間など3つの組み合わせで相関関係が見られたが、いずれもマイナスの弱い相関であった。これ以外は明確な相関関係は確認できず、リテラシーとコンピテンシーはその構成要素も含めてお互いに異なる能力を測定できていると考えられる。角方（2018）も同様に測定結果から、コンピテンシーは従来の教科学力やリテラシーとはある程度独立した能力を表す指標であることを指摘している。

5. まとめと課題

PROG テストの測定結果から、本学の学生たちのジェネリックスキルの概要が明らかになった。リテラシー領域では非言語処理能力がかなり低く、これを構成要素に含む情報分析力も1・2年生においては最も低い要素になっていた。しかし、平均スコアの水準は3・4年生において上昇しており、情報分析力は大学での授業や就職活動などを通じて向上する可能性が示唆された。

コンピテンシー領域では対人基礎力が高く、対課題基礎力が低かった。また、対人基礎力を構成する3つの要素、親和力、協働力、統率力はいずれも高く、一方で対課題基礎力の構成要素の中では特に課題発見力が低かった。しかしながら、対課題基礎力も対人基礎力と同様に学年が上がるにつれて上昇する傾向があり、これが学年を通じたコンピテンシーの総合力の向上に結びついていた。大学での授業やサークル活動、アルバイトなどの経験がこれらの能力を高めている可能性が考えられる。

本稿の分析によって、学生たちのジェネリックスキルの現状を把握することができた。では、大学で学ぶ学生たちはそれぞれの目的、例えば将来の就職のためには一体どの能力を育成すべきなのだろうか。

企業の公表資料や新卒採用担当者への質問紙調査を用いた栗津（2019）の研究によれば、企業が新卒採用の際に学生に求める最も重要なコンピテンシーの要素は、親和力、協働力、実践力、行動持続力、自信創出力であるという。これを前提とすれば、本学の学生のように相対的に高い親和力や協働力は就職において有利に働く可能性が示唆される。この問題については別途、学生の持つコンピテンシーの水準と就職の結果（内定獲得）との因果関係を実証的に分析する必要があるだろう。

《注》

- (1) DeSeCoの詳細については、OECD DeSeCo Project (2005)を参照。
- (2) PROG開発の経緯については、学校法人河合塾・株式会社リアセック(2014)の15-22ページを参照。
- (3) 株式会社リアセックのウェブサイトを参照。
- (4) PROGテストの詳細については、学校法人河合塾および株式会社リアセックのウェブサイトを参照。

参考文献

- 栗津俊二(2019)「日本企業はどのような人材を求めているのか——PROGテスト項目へのあてはめ——」
『実践女子大学人間社会学部紀要』15：1-11.

- 角方正幸 (2018) 「2020 年, 入試が多面的評価に切り替わるインパクト — 主体性評価で入学者はどう変わるか PROG による検証 —」『リクルートカレッジマネジメント』36 (2) : 22-25.
学校法人河合塾のウェブサイト.
(<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/prog/>) 2020 年 1 月 20 日アクセス.
- 学校法人河合塾・株式会社リアセック (2014) 『大学教育に求められるジェネリックスキル 2014 年度 PROG セミナー報告』.
(<http://www.riasec.co.jp/img/pdf/2014seminarreport.pdf>) 2020 年 1 月 20 日アクセス.
株式会社リアセックのウェブサイト.
(<http://www.riasec.co.jp/progtest/index.html> および http://www.riasec.co.jp/prog_hp/) 2020 年 1 月 20 日アクセス.
- 亀野淳 (2017) 「大学生のジェネリックスキルと成績や就職との関連に関する実証的研究 — 北海道大学生に対する調査結果を事例として —」『高等教育ジャーナル: 高等教育と生涯学習』24 : 137-144.
- English, Brian J., Edward McShane, Erik Honobe, Michael Kelland (2019) “Feasibility of Using Generic Skills Testing to Assess Language Learning Ability: Report on the 2018 Joint Research Project,” *Bulletin* (11) :123-134.
- Ito, Hiroshi (2014) “Assessing an Assessment Tool of Higher Education: Progress Report on Generic Skills (PROG) in Japan,” *International Journal of Evaluation and Research in Education*, 3 (1): 1-10.
- OECD DeSeCo Project (2005) *Definition and Selection of Key Competencies - Executive Summary*, OECD.
(<https://www.deseco.ch/bfs/deseco/en/index/02.parsys.43469.downloadList.2296.DownloadFile.tmp/2005.dskcexecutivesummary.en.pdf>) 2020 年 1 月 20 日アクセス.
- Uchida Ryuji, Kodama Jun, Maruta Michito, Okamoto Fujio, Kawaguchi Tomohiro, Ohgi Kimiko and Ishikawa Hiroyuki (2018) “Generic Skills Measurement of Students at Fukuoka Dental College: The Usefulness of the Progress Report on Generic Skills (PROG) Test,” *Research & Reviews: Journal of Dental Sciences*, 6 (1): 10-18.

Measuring the Generic Skills of University Students with the PROG test: Results from a Questionnaire Survey on Literacy and Competency

Shunsuke SAKAMOTO

Abstract

This study measured the generic skills (universal skills required in society) of university students using the PROG test and then evaluated the levels of their literacy and competency and the various abilities that compose them, with particular attention to changes with grade. For example, the ability to analyze information as a component of literacy was remarkably low in the first and second graders, but increased significantly in the third and fourth graders, suggesting that it may improve through university classes and job hunting experiences. In addition, competency tended to improve steadily with grades as a whole, compared to literacy, and the growth in interpersonal skills, which consisted of affinity, collaboration, and leadership, was particularly large.